

学びながら
ふり散策

大田区自然観察路

多摩川下流域

「川と干潟のみち」の 生物・植生

豊草原の瑞穂の国一わが国は古来より日本書紀などで豊草原（豊かに葦の生え茂った原）にある瑞穂（みずみずしい稲の穂）が実っている国と呼ばれている。このことは、わが国の河川下流の低湿地が古代における稲作の重要な場所であり、国の中心地であったことを示している。現在、豊草原はきわめて少なくなったが、河川下流地域は日本各地でなお主要な地域を形成している。

多摩川の下流は、広い河川敷をもち、広範囲のアシ原が形成されており、わが国の原風景を残している。また、東京湾の潮汐の影響を受け、干満の差が大きく、地形的にめずらしい河口干潟が発達している。干潟には貝やカニなどの底生生物が豊富に生息し、それをエサとする魚類や鳥類が数多くみられ、アシ原に加えて生態系の宝庫となっている。

六郷橋と大師橋の間の約3kmの河川敷は、川崎市側の堤防まで約500mの幅があり、大田区側（六郷橋緑地、大師橋緑地）の河川敷は堤防から河岸まで100～400mの幅をもっている。

アシ原と干潟のほかは、グラウンドや園地としての利用が多く、残りは雑草群落となっている。

内陸部は大小の工場が立ち並ぶモノづくりの町であったが、近年、工場の移転や閉鎖が相次ぎ、その跡地は次々と住宅やマンション等に様変わりした。人口も増加しつつあり、今後も宅地化、マンション化が進むと考えられ、この河川敷が魅力ある生活環境としてより一層重視されてこよう。



川と干潟のみちの

植生

川と干潟のみちの植生は、大きく3つに分かれる。人の踏みつけに強いシバ、ツメクサ、オオバコなど草本類が多い河川敷。河川湿地の間にはオニグルミ、タチヤナギ、エノキなどの樹木が目立ち、オギ、セイバンモロコシ、カラスムギなどが周辺を覆っている。多摩川の干潟の影響のある湿地、干潟にはアシの群落が広がり、一部にガマや貴重種でもあるイセウキヤガラ（カヤツリグサ科）の群落がある。これらの群落は、野鳥の営巣地や生育地として、また水辺の環境や生態系の保全にとってきわめて役に立っている。

*アシは「悪し」に通じて縁起が悪いとして「良し」に反転してヨシと呼ばれるようになった。ここではアシで表記する。



アシ（イネ科）

水辺に生える大形の多年草。春に芽生え、夏にかけて背丈1～3m程度まで成長する。葉は秋に枯れるが地下茎から春に再び発芽する。



オニグルミ（クルミ科）

落葉高木。主に山間の川沿いによく見られる。多摩川流域では河口近くでも河川敷に自生している。種子はやや小さく、殻が厚めで非常に堅い。



ウラギク（キク科）

別名ハマシオン。越年性の一年草で河口の汽水域の湿地に群生する。淡紫色の花が咲く。河川改修などによって生育地が減少している。



ヒルガオ（ヒルガオ科）

つる性の多年草。アサガオ同様、朝開花するが昼になっても花がしぼまない。地下茎が増える。



クコ（ナス科）

落葉低木。ある程度湿り気のある水辺の砂地を好む。中国から日本が原産で、果実は昔から食用や薬用に利用される。



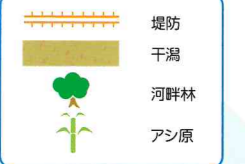
ギシギシ（タデ科）

やや湿った場所に生える多年草。6～8月、緑色で小さい花を輪生させる。若芽は食用。根は薬用に利用される。

川と干潟のみちの

昆虫

河川敷は、草地が多く単調であるため、ほかの大田区自然観察路に比べると昆虫の種類は少ない。しかし夏から秋にかけて、草地をバッタを追いかけながら走る子どもたちの姿は、心を和ませる懐かしい風景となっている。



ホシホウジャク（スズメガ科）

昼間活動してクサギの花などに吸蜜にやってくるスズメガ科のガ。



ナガメ（カメムシ科）

「葉の花につくカメムシ」の意味で、アブラナ科の植物に集まることが多い。



トノサマバッタ（バッタ科）

日本のバッタの仲間中で最大。体は太く、色彩は一般に緑色型と褐色型がいる。



ケラ（ケラ科）

コオロギに近い昆虫。主に地中で暮らし、ミズや植物の根などを食べる。



オオヒラタシデムシ（シデムシ科）

青灰色がかった黒色。動物の死体に集まり、よくミズの死体を食べているのがみかけられる。

野鳥

多摩川河口は、水辺、湿地、河畔林、草原など多様な環境に恵まれていて、多くの野鳥を四季の変化に合わせて観察することができる。



オオヨシキリ (ヨシキリ科)
夏鳥。アシ原に飛来し、大きな声で「ギョギョ」と鳴く。この鳴き声から「行行子」とも呼ばれ、夏の季語になっている。



タシギ (シギ科)
冬鳥として湿地に飛来する。くちばしの長い黄褐色のシギ。枯れ草の中に入ると見つけにくい。



ハクセキレイ (セキレイ科)
白い顔にくっきりとした黒い過眼線が目立つ。止まっているときには長い尾を上下に振る。



ツグミ (ヒタキ科)
褐色と白と黒のまだら模様の冬鳥。林のほか、河川敷などの開けた場所でもよくみられる。



カワラヒワ (アトリ科)
緑がかった褐色の体。翼に長い黄色い帯があり、飛ぶと目立つ。「キリキリ、コロコロ」と鳴く。



ツツドリ (カッコウ科)
「ポボ、ポボ」という鳴き声が筒を叩いているように聞こえるのでこの名がある。キジバトくらいの大きさの夏鳥。



トビ (タカ科)
上昇気流に乗って輪を描きながら上空を舞いあがる姿や「ピーヒョロロ…」という鳴き声はよく知られている。



ノスリ (タカ科)
トビより色が薄く、ずんぐりした感じ。飛翔時、翼の下面と腹の下面と腹の下部に黒っぽく見える部分がある。野ネズミやモグラ、カエルなどを捕食する。

水辺の鳥たち



イソシギ (シギ科)
胸から肩にくい込むような白色模様が特徴の小型のシギ。目は大きく、まわりに細い白色の輪がある。



コアジサシ (カモメ科)
夏鳥。水面の上を飛びまわり、魚をみつけると頭から水面に飛び込んで捕る。「キリッ、キリッ」と鋭い声で鳴く。



ユリカモメ (カモメ科)
冬には多摩川河口で群れがよくみられる。目の後方に小さな黒色斑があるが、夏羽に変わると頭部が黒くなる。



セイタカシギ (セイタカシギ科)
黒と白の体に、細く長い赤い脚が特徴。多摩川河口には冬鳥として多数飛来している。



オオバン (クイナ科)
全身が黒く、くちばしと顔が白い水鳥。泳ぎながら、または潜水して植物質のえさをとる。



カワウ (ウ科)
全身黒色だが、繁殖期の11月～7月には、頭部が白っぽくなり、脇に大きな白斑がでる。



カンムリカイツブリ (カイツブリ科)
主に冬期に多摩川河口、港湾で見られる。カモ類より胴が短く、くちばしがとがっている。



コガモ (カモ科)
ハト大で、カモの仲間では最小。オスは茶色の頭に緑の帯、尻の横に黄色い三角模様が目立つ。冬鳥。



オナガガモ (カモ科)
全身がほっそりとした体つきで、尾が長い。水面で逆立ちして、水底の植物質を食べる姿がよくみられる。冬鳥。

河川敷の生き物

多摩川河川敷には、河畔林や草が広がっていて、ヘビ、トカゲなどの爬虫類やモグラ、アブラコモリなどの哺乳類も生息している。



アオダイショウ (ナミヘビ科)
中型のヘビで、日本固有種。様々な環境に生息していて、多摩川河口の河川敷や湿地でもみられる。



ニホンカナヘビ (カナヘビ科)
「ヘビ」と名前がついているがトカゲの仲間。体は細長く、尾は全体の2/3程を占めている。

“モグラ塚”
多摩川の河川敷、グラウンドでよくみかけるこの盛り土は、アズマモグラ (モグラ科) が地下にトンネルを掘り、掘り出された土が地上に出されるものでモグラ塚と呼ばれる。主に昆虫やミズなどを食べている。

六郷橋緑地付近



本羽田公園展望台



川崎市



大師橋緑地



海老取川分岐点付近

干潟観察の注意点

干潟の時間を調べてから行こう!

干潟の観察は、大潮または中潮の干潮時間帯がベストです。必ず事前に新聞やインターネットで時間を調べておきましょう (昼間の観察は4月～9月が良好)。野鳥の探餌も干潮時によく観察できます。

裸足は禁物。長靴を忘れずに!

残念なことに多摩川河口干潟の泥の中には、まだ多くのガラス片、タイル片、プラスチックなどがあります。安全のためにも裸足は禁物。長靴を忘れずにお持ちください。サンダルも危険です。

帽子をかぶって、水分補給も忘れずに!!

干潟では日影がありません。必ず帽子をかぶり、ぬれタオルや水筒も常に身につけておいてください。



六郷橋からの展望 (河畔林)

干潟の

生き物たち

干潟の泥には微生物が多数生息していて、カニ類、貝類、ゴカイ類などそれらをえさとする動物が多数生息。さらにそれらをえさとしているウミネコ、カモメ、アジサシ、サギ、シギ・チドリ類などの飛来地になっている。干潟の貝やゴカイ、カニなどは汚れを食べて水をきれいにしてくれている。



ベンケイガニ (ベンケイガニ科)
水からあまり離れず、アシ原の中にあることが多い。オレンジ色がかった赤い色が目立つカニ。



クロベンケイガニ (ベンケイガニ科)
アシ原の中に巣穴をほって生活する。多摩川では、丸子橋付近でもみられる。



トビハゼ (ハゼ科)
両眼が頭部の上方にやや突き出ている。胸びれが発達している。干潟などの泥底をはい回る。



フナムシ (フナムシ科)
体は小判形で甲らにおおわれ、移動が素早い。海中では生存できない。



コメツキガニ (スナガニ科)
河口付近の干潟の中でも砂地に群れてすむ。干潮時に砂の上に出て砂を口に入れ、えさをこして食べ、残りは砂だんごにして巣穴のまわりにばらまく。



ケフサイソガニ (モクズガニ科)
やや汚れた石ころのある海岸や河口付近の干潟に多くすむ。オスはハサミの指のつけ根にやわらかい毛のふさがある。



ゴカイ (ゴカイ科)
体の両側に剛毛のあるいぼ足を持ち、これで運動する。釣餌に用いられる。



アシハラガニ (モクズガニ科)
河口近くのアシの茂みに巣穴をほって生活する。オスには目をおさめるくぼみの下につぶつぶがある。はさまれると結構、痛い。



チゴガニ (スナガニ科)
干潟の泥まじりのところに群れをなしている小さなカニ。甲の腹面、口の左右が水色や淡緑色のものもある。



ヤマトシジミ (シジミ科)
淡水域や汽水域に生息する小型の二枚貝。



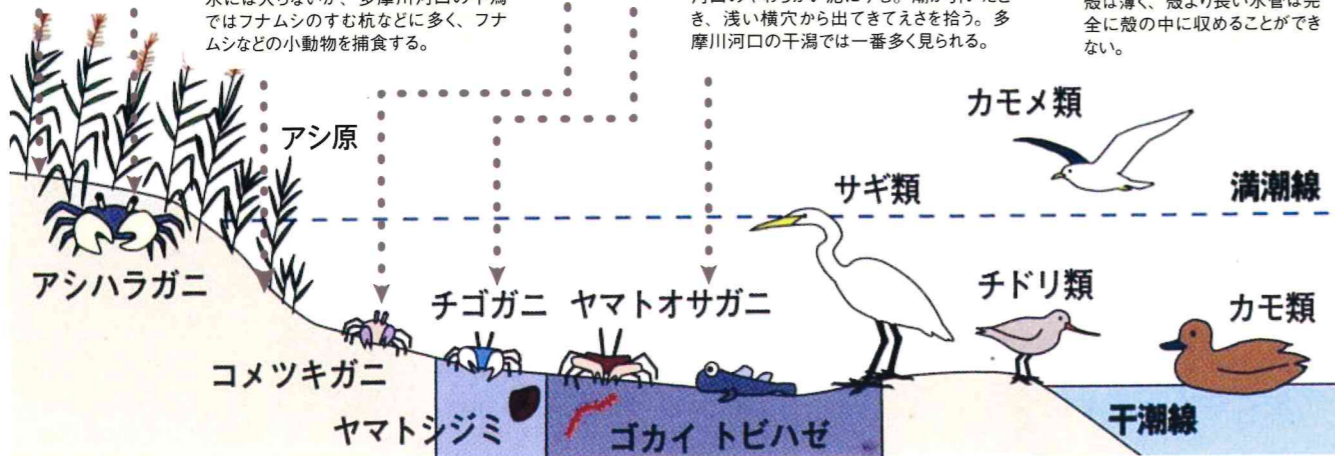
カクベンケイガニ (ベンケイガニ科)
水には入らないが、多摩川河口の干潟ではフナムシのすむ杭などに多く、フナムシなどの小動物を捕食する。



ヤマトオサガニ (オサガニ科)
河口のやわらかい泥にすむ。潮が引いたとき、浅い横穴から出てきてえさを拾う。多摩川河口の干潟では一番多く見られる。



ソトオリガイ (オキナガイ科)
殻は薄く、殻より長い水管は完全に殻の中に収めることができない。



干潟の役割

多摩川下流のアシ原や干潟は面積も広く、水生生物のほか鳥類や昆虫類などが多数生息し、現在でも自然要素の強い多様な生物の生息環境を形成している。多摩川下流域はこれまで人工改変が多く水質も悪かったため、生態学的にはあまり注目されていなかった。近年、多くの種や希少種が確認され、その重要性が高まっている。干潟には多様な生物が多数生息している。それらは汚泥を食べて消化したり、巣穴によって底泥に酸素を供給して底泥や水質の浄化を行っている。さらに、自ら魚や鳥のえさとして食べられるため、浄化力はかなり大きいと考えられている。干潟は水辺の食物連鎖の重要な部分を担っていて、生態系の中心となっている。



この地域は近年、野鳥観察や干潟での自然体験活動に訪れる人が多く、またヤマトシジミを採る人も増えている。したがって、アシ原や干潟の利用について、現状を保全しつつ管理していく必要がある。それには生態系への理解を深め、利用のマナーやルールについて、利用者（住民）自身が自主的に考えていくことが望まれる。



アオサギ(サギ科)

ちょっと寄り道

六郷水門

六郷水門は、1931年（昭和6年）に六郷用水の末流をはじめ、六郷や池上、矢口、羽田の一部地域の排水口として建設された。豪雨により多摩川の水位が上がった場合、水門は閉じられるが、内陸部も浸水することが多く、それをポンプによって多摩川に排水する必要があった。明治期の地図をみると、この地域は排水河川が集中し、典型的な湿地であったことがわかる。



建設の際、舟による物資の輸送を兼ねて内陸部に運河が開削された（雑色運河）。水門の赤レンガに丸みを帯びたデザインは、重厚な雰囲気でも歴史を感じさせ、多摩川下流のシンボルと言われている。現在は水門から通じる運河の一部が公園として整備されていて、貴重な土木遺産になっている。



大田区自然観察路『川と干潟のみち』の生物・植生

発行／2019年3月 大田区環境清掃部環境対策課

編集／一般社団法人 地域パートナーシップ支援センター デザイン／松井由莉

写真／小野紀之、大塚 豊、鈴木百合子、山邊功二

※このパンフレットは、区民協働調査を基に、区内環境団体(多摩川とびはぜ倶楽部、おたの野外博物館)と協働で作成したものです。